貝田に残る歴史的建造物

明治期から大正期にかけて大型で総２階建の養蚕住宅が軒を並べるようになり、石蔵や土蔵などが付属します。また建物の構造は、瓦葺の屋根が多くなり、軒裏まで塗り込められた外壁など防火の工夫がされるようになります。屋敷内には、屋敷林や防火水槽などが伴うようになります。また大正期以降、町内で普及した国見石をはじめとする凝灰岩の石蔵も、耐火性の強さから好まれるようになりました。

①国見石の石蔵

昭和6年(1931)に建築された国見石を用いた蔵。街道に面して建つ石造2階建の蔵は、鉄の重厚な扉が耐火性に優れる国見石とともに防火の機能を持っています、壁面の手掘りによるツルメ仕上げと、寄棟造りの屋根が特徴です。

②養蚕住宅（佐野屋）

旧宿場の中央に位置し、「佐野屋」の屋号を持つ。江戸時代には旅籠を営み、隣接する「得利屋」が脇本陣、佐野屋が本陣であったと伝わります。大正15年(1926)に建築され、養蚕業に適した造りとなっています。広く、光の入る構造となった屋根裏や床下の火鉢、屋根の棟には気抜きなど蚕の温室飼育のための装置が備えられています。

③養蚕住宅

この養蚕住宅は、大正4年(1909)に建築された木造2階建の養蚕住宅です。入母屋造りの屋根は瓦葺で、大棟には気抜きが造り付けられています。また壁は、軒裏まで丁寧に塗籠められた大壁造りとなり、一部の壁は漆喰塗、2階部分には鉄板雨戸が取り付けられ、防火の機能を持つ屋敷林とともに隣接地からの延焼を防ぐ工夫がされています。

④貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋

牛沢川(貝田付近では「姥神沢」とも)に架かる貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋は、明治20年(1887)の黒磯－塩釜間開業当初の旧鉄道橋で、大正9年(1920)まで使用されていました。橋の構造はレンガ積アーチ構造で、町並みに近接して鉄道が往来していた当時の様子を伝えています。

⑤最禅寺本堂

最禅寺は、天正16年(1588)または寛永3年(1626)に開山されたと伝わる曹洞宗の寺院で、旧奥州街道が大きくカーブする町尻に位置します。寄棟造の本堂は、桁行7間半梁行6間の大きさで、明和2年(1765)に建てられ、軒はセガイ造りで広くとられています。

本堂内には、本尊とともに観音堂が安置されています。観音堂は、伊達秩父三十四観音の第31番札所として信仰を集めています。

⑥秋葉神社本堂

秋葉神社は、文政10年(1827)に現在の場所に遷座され、火伏の神として信仰されています。平成元年(1989)に再建された現在の本殿は、切妻造りの屋根に、板倉造りの建物です。秋葉神社(秋葉大権現)と金華山神社が祀られています。

貝田村絵図　元禄11年（1698年）

旧貝田宿の名残

江戸時代の貝田宿を伝える建造物は、明治期から大正期の大火により最禅寺を除き残されていませんが、かつての屋号、町割りなどの土地利用、水路・水場などの水利用から当時の名残を確認することができます。

旧問屋・口留番所・本陣・脇本陣・旅籠などの旧家において、現在も当時からの屋号が受け継がれています。得利屋は、安政２年（1855）の『東講商人鏡』に優良旅籠の１つとして記載があり、脇本陣としても使用されました。現在も屋号「得利屋」と呼ばれています。

コラム

御瀧神社（光明寺）

御瀧神社の湧水

伊達朝宗夫人墓　文政4年(1821)建立

貝田地区から車で5分のところにある光明寺集落。豊富な湧水により集落が形成され、現在も水場や水路の維持・管理や水に伴う信仰・祭礼の活動が継承されながら、水が利用されています。

湧水は、透明度の高い水質と豊富な水量により清浄な空間をつくりだし「御瀧神社の湧水」として人々の信仰の対象となっています。さらに一帯の谷地は、平安時代の三常院(976年創建)、鎌倉時代初頭の伊達朝宗夫人墓などにみられるように、古代以降聖域として存在してきました。伊達家4代の伊達政依により「伊達五山」の一つ「光明寺」として整備され、江戸時代まで発展する。